

大学生生活の過ごし方から見た学生タイプの分析 －複数の高等教育機関による比較と検討－

Examination of Student Types from a College Life

- Comparison and Consideration by the multiple higher education institutions -

徳野 淳子^{*1}, 田中 洋一^{*2}, 杉原 一臣^{*3}, 籠谷 隆弘^{*4}, 山川 修^{*1}
Junko TOKUNO^{*1}, Yoichi TANAKA^{*2}, Kazutomi SUGIHARA^{*3}, Takahiro KAGOYA^{*4}, Osamu YAMAKAWA^{*1}

^{*1} 福井県立大学

^{*1}Fukui Prefectural University

^{*3} 福井工業大学

^{*3}Fukui University of Technology

Email: tokuno15@fpu.ac.jp

^{*2} 仁愛女子短期大学

^{*2}Jin-ai Women's College

^{*4} 仁愛大学

^{*4}Jin-ai University

あらまし：福井県大学間連携事業：F レックスでは、各参加機関の学生の特徴を理解し、教育改善に役立てるため、2010 年度から毎年学生意識調査を実施している。本研究では 2014 年に実施した調査のうち、学生の一週間の過ごし方に焦点を当て、その回答から学生をタイプ別に分類した。機関や学問分野、さらには学部学科専攻毎に比較したところ、それぞれで各学生タイプの割合が大きく異なることが確認された。
キーワード：教学 IR, 高等教育, 学生意識調査, 大学連携, 授業外学習

1. はじめに

近年、大学進学率が高まり、入試の形態も多様化していることなどから、学生の入学時の学力や目的意識、学習意欲も多様化してきている。大学等高等教育機関ではこのような学生の特徴を複眼的に理解し、教育していく必要がある。

福井県大学間連携事業（通称：F レックス）では、各参加機関、各学部学科専攻の学生の特徴を理解し、教育改善に関わる IR(Institutional Research)データを提供することを目的に、2010 年度から毎年 1 回、学生意識調査アンケートを実施している。本稿では、2014 年度に実施した調査のうち、学生生活の過ごし方に焦点を当て、その回答から学生をタイプ別に分類し、機関や学問分野による違いを分析する。

2. F レックス学生意識調査

2.1 調査概要

F レックスの学生意識調査は、先行研究⁽¹⁾の調査項目を踏襲し、一部 F レックスの各機関の実態に合わせて変更しながら、学生の将来設計や、大学生活で身に付いた知識・技能、教育満足度など全 9 問について調査している。このうち、「大学生生活の過ごし方」として、学生の活動パターンを把握するため、1 週間当たりどのような活動にどれくらいの時間を費やしているかを調査した。活動内容は、授業への参加、自主学習、友人とのつきあい、パソコン利用、サークルなど 18 項目を設定し、それぞれの活動に費やす時間数を“(1)全然ない”,“(2)1 時間未満”～“(8)21 時間以上”と 8 段階で回答を求めた。

2.2 実施概要

学生意識調査は毎年 11 月頃に F レックスの FD チ

ームを中心に実施し、IR-WG が分析を行っている。2014 年度は F レックスに参加する 5 校で記名または無記名式で実施した。回答者数は 3,131 名であった。

3. 学生タイプの分析

3.1 因子分析による共通因子の検討

「問 3：大学生生活の過ごし方」の 18 項目の活動に対し、その相関関係から共通因子にまとめて分析を行うため、回答データに対し因子分析を行った。因子分析では最尤法を用いて解釈可能な 7 因子を抽出した。各因子は、因子 1「授業以外の自主学習」、因子 2「娯楽（メディア・ICT 利用）」、因子 3「娯楽（読書）」、因子 4「友人とのつきあい」、因子 5「授業への参加・予習復習」、因子 6「一般的なアルバイト」、因子 7「通学・新聞」と解釈された。

3.2 クラスタ分析による学生タイプの抽出

推定された 7 因子の因子得点を用いて、クラスタ分析（k 平均法）を行い、極端なメンバー数の偏りが無い 6 群に分類した。結果を図 1 に示す。6 つの学生タイプは、3.1 で述べた 7 軸の因子得点平均値から特徴を調べることで、タイプ 1「科目履修重視型」、タイプ 2「自主学習・人間関係重視型」、タイプ 3「娯楽（読書）傾倒型」、タイプ 4「デジタル娯楽・アルバイト重視型」、タイプ 5「アルバイト重視型」、タイプ 6「無特徴型」と命名した。

4. 学生タイプの比較

4.1 機関による学生タイプの比較

機関毎に学生タイプの存在比率を比較した結果を図 2 に示す。機関 A はアルバイト重視型が、機関

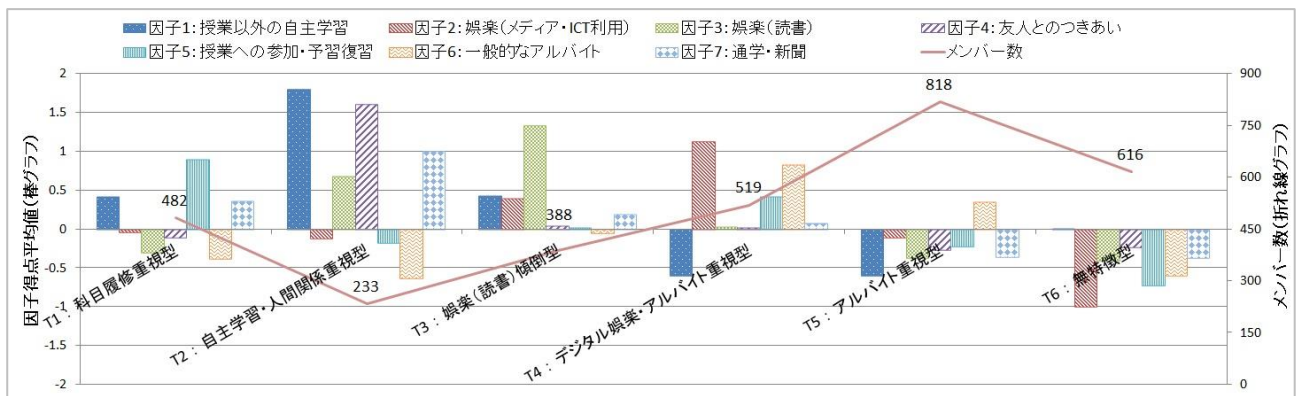


図 1. 「大学生生活の過ごし方」から見た学生タイプ：2014 年度の調査結果（有効回答数：3,056 件）

B は無特徴型が、機関 C,E は科目履修重視型が、機関 D はデジタル娯楽・アルバイト重視型が多いなど、機関によって学生タイプの存在比率に顕著な違いが出ていることが確認できる。また同じ機関であっても、学年や学部学科専攻などに細分類することで、学生タイプの存在比率が異なることが確認された。

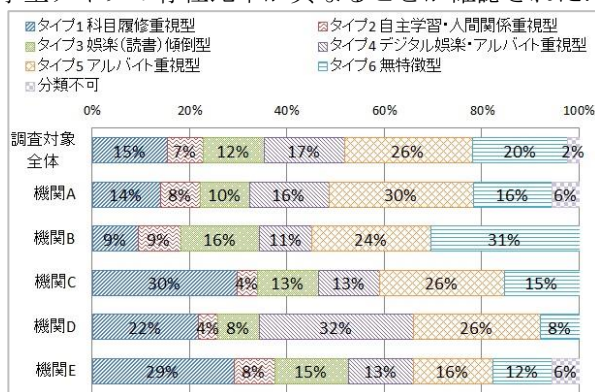


図 2. 機関別学生タイプの存在比率

このうち機関 B に多い「無特徴型」とは、他のタイプの学生に比べ活動時間が少ないタイプである。しかし、その割合は調査対象全体の約 20% も占めるため、このタイプの学生のみ抽出して再分類した。

結果、全ての活動において時間が少ないタイプの他に、他の学生タイプよりは活動時間は少ないが、自主学習や友人とのつきあいなど特定の活動に時間を費やすタイプが確認された。

4.2 学問分野による学生タイプの比較

次に、各学問分野の学生の特徴を探るため、F レックス全参加機関の学部学科専攻を分野別に分類して学生タイプを比較した。学問分野は「文部科学省学科系統分類表⁽²⁾」に従って分類した。本調査には、短期大学や高専も含まれるが、大学の小分類（学科名）に近いものに当てはめて分類した。

図 3 の結果から、「社会科学」や「工学」に比べ「家政」や「教育」を専攻する学生は科目履修重視型が多いことなど分野間の違いが確認できる。しかし、同一分野でも、機関や学部学科専攻によっては特徴が類似しているケースもあれば、全く異なる特徴を

示すケースもみられた。その例として、図 4 に「家政」を細分類した結果の一部を示す。

以上から、学生タイプは個々の機関、学科毎に細分類して慎重に特徴を見ていく必要がある。なお、F レックスでは、学年・学部学科専攻まで細分類した結果を各機関にフィードバックしている。

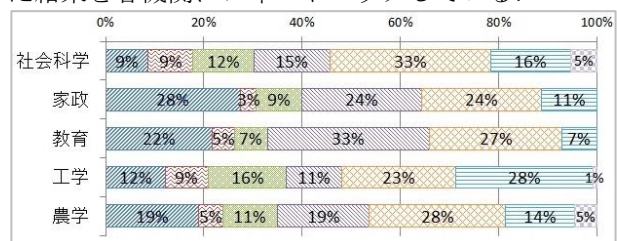


図 3. 分野別学生タイプの存在比率^{1,2}

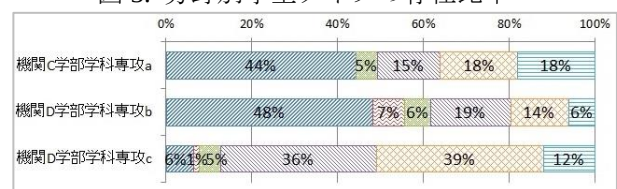


図 4. 「家政」に分類される各学部学科専攻の学生タイプの存在比率²

5. まとめ

大学生生活の過ごし方から分類した学生タイプについて、複数の高等教育機関での比較を行った。その結果、同じ学問分野であっても機関によって各学生タイプの割合が異なることが確認された。今後は、この機関による違いがいつの時点で生じるのか、学生タイプの経年変化を調査していきたい。

参考文献

- (1) 溝上慎一, “「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討—正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す—”, 京都大学高等教育研究第 15 号, pp.107-118, (2009).
- (2) 文部科学省 学科系統分類表 http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08010901/006/004.htm

¹ 図 3 では、一学科しか割り当てられない分野は省略した。

² 図 3, 図 4 のグラフの色分けは図 2 と同じ。